



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.263
2025.8.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

第4回 ◆ 馬渡埴輪製作遺跡の調査と全容の解明(2) ◆

1965(昭和48)年8月の馬渡埴輪製作遺跡第1次(A地区)調査では、窯址の存在を明らかにした埴輪馬が出土した傾斜面から、9基の登り窯を発見し、さらに窯址の上部に竪穴状の遺構を確認、遺跡の未知なる大きな期待をもって終了した。

1966(昭和41)年3月15日からB地区の調査を始めた。B地区は本郷川水系の小支谷の屈曲部に位置し、水田面が凹凸する場所の凸部に、C地区は凹部にと相対して位置している。B地区は、馬渡埴輪製作遺跡のなかで、東側に位置し、調査早々に小河川の底面から確認されていた焼土を中心に2基の登り窯が検出された。そのうちの1基はトンネル式の窯址で、A地区の窯址と構造が違うことが判明した。2基の窯址を中心に東西30m、南北25mの台地斜面部を調査したが、窯址は築かれていないことを確認する。さらに、地形に合わせて東西25mのトレンチを数本設置して調査した結果、窯址から10mほど離れた地点で5×7.2mの長方形竪穴を検出した。竪穴遺構では、床面の南西隅に1.8×1.1mの浅い坑を検出し、その坑内に厚さ30cm程の青白色粘土塊を認め、工房址と断定している。工房跡は馬渡埴輪製作遺跡では初めての確認であった。

当時、B地区には東側からの市営団地造成工事が進捗しており、工事現場には大塚らが立ち会って遺構の確認を行っているが、工房址は確認されていない。その後、数か所の円形プランの落込みを確認されたが、調査には至らなかった。

調査の初日に、宿舍から現地まで調査員を送迎し、ジープを運転する市職員の雲類鷲和泉より、2kmほど離れた工業団地の工事現場で、石棺が発見されたという知らせが大塚にもたらされる。踏査の結果、鉾の宮神社近くで、重機が表土を削いでいるときに、箱式石棺の天井部を破壊していることが判明し(鉾の宮1号墳)、さらに周囲を踏査すると20mほど離れた地点に埴輪片が散乱していることを確認した。(同2号墳)。工事が中断しているとのことで、翌日から、馬渡埴輪製作遺跡B地区と鉾の宮古墳群と調査を2班に分けて実施することになり、筆者は鉾の宮古墳群の調査に行くよう命じられた。

鉾の宮1号墳の石棺等の調査は、大学院生の飛高憲雄を主にして進めることになる。石棺は、地元で産出する「高野石」と呼ばれる軟質の凝灰岩を加工した箱形石棺で、東西両側壁各2枚、南北両側壁各1枚、蓋石4枚、底石3枚からなる。石材はいずれも入念に仕上げられ、蓋石は蒲鉾状を呈していた。石棺の内法長1.8m、北側幅48cm、南側幅39cm、深さ35cmを測る。北側の蓋石が重機により破損され穿れており、骨粉状の頭骨部の上に土砂と石棺の石材が落ち込んでいた。内面はベンガラ塗布により全面に彩色されている。人骨は北側に頭部を置き埋葬され、西壁に沿って直刀(全長100.8cm)、東壁頭部近くに鉄



鍬20本、腰骨付近の東壁際に鹿角製柄の刀子(10.6cm)が副葬されていた。石棺は、南北3.4m、東西2mの土坑内に設置されていた。墳形については、調査当初円墳と認識されたが、その後の調査で前方後円墳と確認された。

埴輪片は、重機により排土された土砂の中から発見された。円筒埴輪と形象埴輪が存在し、円筒埴輪は、朝顔形埴輪も見られた。また形象埴輪は人物埴輪や馬形埴輪の破片が多く検出された。



鉾の宮1号墳から西に20mほどに2号墳が位置したが、見つかった粘土礫では、原田道雄が地面に接するような姿勢で慎重に竹べらで調査していた。2号墳の周囲には、埴輪が円形上に散乱している場所があり、周堀の調査を指示される。周堀からは、埴輪馬1、人物埴輪4の女性埴輪の頭部が出土し、さらに多くの円筒埴輪片を検出した。今から60年も前の話であるが、あまりにもうまく事が運びすぎている。

ところで、鉾の宮古墳の出土遺物は、1911(明治44)年3月に、帝室博物館に那珂郡佐野村大字高場宇宮原出土品(人物埴輪、埴輪馬、円筒埴輪片)として地元の清水與四郎により寄贈されている(『東京国立博物館図番目録 古墳遺物編(関東1)』)。寄贈ハニワは、2号墳の埴輪である。

ヤンサマチは、酒列磯前神社(名神大 祭神 少彦名命 大己貴命)の祭礼で、常陸二之宮静神社(名神大 祭神 主神 建葉槌命 手力雄命他を配祀)から酒列磯前神社の神磯である護摩壇磯への浜降り神事と東海村の村松大神宮下から6頭の馬が磯崎までの海岸線を疾走し、到着地点に一番矛を投げ付け、五穀豊穡・大漁・子孫長久を占う那珂台地最大の祭りであった。鎌倉時代から行われ近世に戸藩の庇護を受けとくに盛んであったが、1929(昭和4)年に中断している。最後の競馬に勝利したのが、鉾香取(鉾の宮)神社から宮出しされ、それ故、村の鎮守として崇められた神域から出土した埴輪を帝室博物館に献納したのではなかろうか。1.5km離れた常磐線佐和駅が設置されたのは明治42年である。

ところで、1995(平成7)年11月にひたちなか市文化会館において日本考古学協会茨城大会が多くの関係者のご努力とご協力により開催されたが、その際のシンポジウムの一つが「関東における埴輪の生産と供給」というテーマであった。馬渡埴輪製作遺跡を調査する前の大塚初重の調査に際しての課題も「埴輪製作遺跡と供給地」の確認であったはずである。馬渡埴輪製作遺跡の調査は、調査開始後、一年以内に、焼成地と供給地である鉾の宮古墳群を調査しているが、この実現は、まさしく地元住民の郷土愛と研究者の信念、県・市行政の文化財保護・保存がもたらした賜物であった。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと(第4回) 鴨志田篤二 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む(第22回) 山本暉久 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第255回) 木村 聡 …3
■考古学者の書棚「特別展「古代DNA-日本人のきた道-」展示図録」 青笹早季 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第22回)

山本 暉久

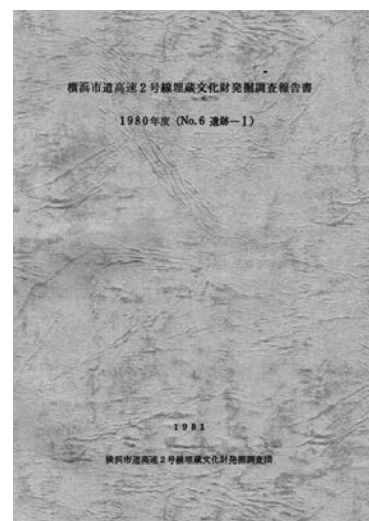
22. 神奈川県職員としての考古学 その6

埋蔵文化財保護行政と県立埋蔵文化財センターへの異動

1982(昭和57)年4月、神奈川県立埋蔵文化財センターが新たに設立され、埋蔵文化財の調査・研究を専門的に実施する組織がスタートすることとなった。それまでセンターの設立に関わる事務的な作業に携わっていた関係から、当然、県文化財保護課からセンターへ異動するものと思っていたのだが、案に相違して、3月末の異動の内示はなく、そのまま残留することとなった。専門職としての扱いではあったが、一般事務職としての県職員は、同じ所属に3年間ほど勤務して、その後他の部局へ異動するのが普通であったから、また3年間、埋蔵文化財の保護行政事務に携わることにいささか気が重かったが、そのような後ろ向きな考えかたはやめて、気持ちを入れ替えて携わることにした。どこでも同じであろうが、埋蔵文化財保護行政とは、開発部局との埋蔵文化財の取り扱いにかかる調整が主要な職務であり、それに付随して市町村教委との連携と指導のほか、埋蔵文化財にかかる文書事務などがあった。民間の開発事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いは、基本的には市町村が担当し、専門職の配置がない市町村には、適宜指導と助言を行うのが一般的であり、県が取り扱うのは、政令指定都市域を除く公共事業(県事業や国・公団などの開発事業)に関わって生ずる埋蔵文化財をどう調整するかというのが主な仕事であった。前提として、「周知の遺跡」(埋蔵文化財包蔵地)に関わる事業については、現地の調査(分布調査や試掘調査)などを実施し、遺跡の存在が確認された場合は、本格調査の範囲や調査経費などを事業者側と調整し、実施の場合は、県立埋蔵文化財センターに調査を依頼することになるが、調査担当職員数の関係もあり、すべてを受けきれぬわけではなく、その場合は、調査団を組織して対応することとなり、その調整もなかなか大変であった。ただ公共事業が対象であるから、本格調査の必要性や調査費用(調査後の報告書作成作業を含む)の事業者側負担(いわゆる「原因者負担」の原則)については、比較的理解を得られるケースが多かった。しかし事業者側が計画している開発行為のスケジュールとどのように折り合いをつけることが苦心する点でもあった。こうした開発行為に対応する埋蔵文化財の調整事務は、遺跡の価値や調査に対する判断はともかく、学問としての考古学とは無縁であり、今なお、全国各地の地方公共団体に属する埋蔵文化財の専門職が日々悩みながら対応し続ける現実でもある。

そうした公共事業に対応して、私が調整した事例の一つを取り上げてみよう。それは首都高速道路公団(現・首都高速道路株式会社)が事業主体となって計画された「横浜市区高速2号線」(横浜市中区山下町～保土ヶ谷区狩場町)建設にかかる埋蔵文化財調査である。この案件を担当することになったが、県直営の調査は困難であったため、民間の調査団を編成する必要があり、個人的な伝(つて)を頼って、大学・大学院時代に指導を受けた岡田威夫先生(共立女子高校教諭)に調査担当をお願いし、調査団長は恩師・櫻井清彦先生(当時・早稲田大学文学部教授)にお引き受けいただいて、横浜市区高速2号線埋蔵文化財発掘調査団を組織して調査を実施することとなった。当該事業

予定内の遺跡の所在については、横浜市教育委員会による分布調査が実施されていたが、あらためて、私と岡田威夫さんが中心となって分布調査を行い、その結果を受けて、遺跡の詳細を明らかにするため、10地点の試掘調査を1979(昭和54)年、大学の夏期休暇期間を利用して7月末～8月にかけて約1箇月間実施した。この結果を受けて、1980(昭和55)年～1983(昭和58)年にかけて、No.6地点・No.9地点の本格調査が実施された。なかでもNo.6地点からは、縄文時代中期住居址群、弥生時代後期住居址群、古墳時代初頭の方形周溝墓群などが検出され、道路幅に調査は限定されたものの大規模集落・墓地遺跡の一部であることが判明し、大きな調査成果をあげることができた(写真参照)。この調査は、県立埋蔵文化財センターが設立される過程に行われた調査であり、調査期間中は行政指導という名目でたびたび現地に通った思い出深い遺跡となった。多くの学恩を賜った、恩師・櫻井清彦先生も岡田威夫さんも今はともにお亡くなりになり、歳月の過ぎ去ることの早さが痛感される。また、この調査を通じて、御堂島正(大正大学)や長岡史起(県教育局文化遺産課)らの新たな仲間たちを県職員として迎え入れることができたのも望外の喜びであった。



▲横浜市区高速2号線内遺跡調査報告書1980年度 No.6遺跡-1 1981.2

そのような経験を積み重ねつつ、1985年4月、神奈川県立埋蔵文化財センターにようやく異動することとなった。異動早々、鎌倉市山之内に所在する帰源院下やぐら群の調査を担当することとなった。円覚寺の塔頭(たっちゅう)である帰源院の崖下にあるやぐら群(中世鎌倉の岩窟墓)で、県土木部による急傾斜防災工事に伴う調査であった。やぐら群の調査経験もなく、中世期の知識も皆無に近く調査に多少不安であったが、幸い、当時鎌倉考古学研究所におられた手塚直樹(青山学院大学)さんの協力をえることができた。土地柄なのか、調査中に近隣住民から不審者扱いされて警察に通報されてしまうという笑えないエピソードも今は懐かしい。

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英之記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 255

伊豆長浜城跡 ～静岡県沼津市

木村 聡

駿河湾の最奥部に築かれた海の城

伊豆長浜城跡は沼津市南部の内浦長浜・重須にまたがる岬の上に築かれた小田原北条氏の城である。旧財閥の別荘が1970年代に取り壊された後、現地は荒れるにまかされていたが、城に関連する文書史料等が豊富に存在していたことから、1985年には沼津市がその実態解明に向けて詳細分布調査を実施し、4つの曲輪と15の小曲輪の他、曲輪上の土塁跡や堀切等を確認した。豊富な文献史料と遺構の良好な残存状況から、1988年には国史跡に指定されている。

北条氏の祖、伊勢新九郎盛時(北条早雲)は、興国寺城から堀越公方足利茶々丸の館を急襲し、葦山に城を構え戦国大名としての第一歩を踏み出したとされる。以後、伊豆国は戦国期を通じて北条氏の領国であり、なかでも奥駿河湾の重須湊と長浜城は、伊豆国の拠点である葦山城を守るための海の城として機能した。

この地に転機が訪れたのは天正7年(1579)のことである。北条氏の言い分に従えば、今川義元亡き後の駿河に侵入してきた武田氏はこれまでの同盟関係を破棄して、現在の沼津中心市街地の狩野川河口部に三枚橋城を築いた。狩野川は伊豆の中心を流れる重要な河川であり、北条氏にとってその河口部は西の玄関口として重要な港であったため、北条氏はこれを「敵対同然」として非難し、伊豆の諸城を改修してその脅威に備えることとした。それら城のうち、海の防衛を担ったのが長浜城であった。三枚橋城が築かれたのと同じ年に、地元衆だけではなく、北条氏の水軍の事実上の統括者であった梶原備前守が入城したことを考えると、北条氏にとってその脅威は大きなものであったことが推測できる。

そして翌年の天正8年(1580)、武田・北条両氏の水軍による駿河湾海戦が行われた。戦いの結果は明らかではないが、双方に勝利をうたう史料があることから、一進一退の攻防があったのだろう。その後、天正18年(1590)豊臣秀吉の小田原攻めにより、長浜城は再び緊張状態におかれたが、北条方の小田原籠城策に呼応し、水軍の主力も東伊豆等に集結したことから、長浜城は水軍基地としての機能を失い、葦山開城と共に廃城となったものと考えられている。

長浜城跡の評価をめぐる

以上のような歴史的な経過を辿った城であったため、史跡指定当時は軍事面を強調する評価が多かった。実際に史跡指定の際の意見具申には「その存続期間が戦国時代末期の短期間に限定できること、当初から水軍の基地として築造されていること、(中略)戦国

時代末期の城郭としての価値は非常に高いものがある。」と記されている。この評価はもちろん正しいのであるが、一方で詳細分布調査において戦国末期以前の遺物が出土していたにも関わらず、文献史料に残る情報が優先されて考古資料の評価が見落とされていた点は、まだ城郭研究において考古学が補助的に扱われていた研究段階の様子を表していたといえよう。

しかし史跡指定後、市は復元整備に向けた遺構確認調査を広範囲で実施して、実態解明に努めた結果、上記の評価は必ずしも長浜城跡の価値の一側面でしかないことが見えてきた。具体的な成果としては、文献史料による城の年代と合致しない15世紀後半から16世紀前半段階に位置づけられる遺物が一定量出土していること、さらに堀は16世紀前半にはすでに築かれていて、この段階ですでに城として機能していること、それが16世紀後半に造り変えが行われて、今の姿になっていることなどである。

こうした視点で、再度16世紀前半から中頃の文献等を見直すと、この岬は戦国期でも平時の際にはカツオやマグロなどの漁場としての利用があったとうかがえること、またこの地の土豪が国を超えて対岸の駿河国まで物資を運んでいたことなど、重須湊が軍事港というだけでなく、小田原北条氏にとって西方と繋がる重要な場所であったことなどが評価できるようになった。

今日では「城＝軍事施設」と一側面だけで考えている研究者は少ないであろうが、文献史学・考古学・民俗学などによる城の総合調査によって長浜城跡の多様な姿を明らかにすることができた。史跡の整備にはこうした評価が盛り込まれており、現地を訪れたならば、周囲の環境に溶け込みながらもちよとした異空間となった史跡を感じることができるだろう。

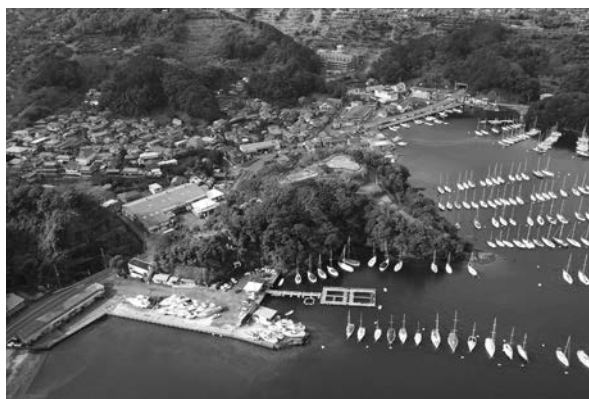
城跡の価値を考える

最後に、長浜城跡がなぜ筆者のフェイバレット・サイトなのかについて。実は沼津市役所に就職して最初の仕事のひとつが、この長浜城跡の整備だった。新人に国史跡の整備を担当させるというのは、今となっては思うところもあるが、多くの方から熱心なご指導をいただき、2015年に史跡公園としてオープンすることができた。まだ振り返るには早い年齢だと思いたい、いずれにせよ未熟な20代の思い出が詰まった場所である。

現在城跡は地域の憩いの場としての利用のほか、近年ではアニメの舞台ともなったことから、そのファンが全国、さらには海外からも訪れるようになった。コロナ禍の前に行われていたイベントでは、

史跡の中で甲冑武者とアニメのコスプレを楽しむ人が並ぶという様子も見られた。今年は整備から10年。様々な人が訪れるようになって、漁場、物資の集積場、軍事的な城であったこの場所にも新たな価値が加わりつつある。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは高橋香さんです。



▲全景(北東から)



▲第二曲輪

考古学者の書棚

「特別展「古代DNA－日本人のきた道－」展示図録」

国立科学博物館 NHK、NHKプロモーション、東京新聞、中日新聞社 青笹 早季

はじめに

このたび、前号の同コーナーを執筆した(友人の少ない)夫より、家庭内でバトンを受け取った。書評には到底及ばないが、特別展を見学した感想も兼ねて、図録の内容について簡単に紹介する。

本書は、2025年3月15日から6月15日まで、独立行政法人国立科学博物館(以下「科博」とする)で開催された、特別展「古代DNA－日本人のきた道－」(以下「本展」とする)の展示図録である。ここでは、本書の構成を紹介したうえで、筆者の関心事の中心となる第2章とトピック1については、所感も含めて述べてい

本書の構成(展示構成)

本書は、プロローグから始まり第1章の旧石器時代から、第4章の古墳時代までを時系列で構成され、第5章の琉球列島、第6章の北海道(アイヌ)の全6章からなり、そしてエピローグに至る。この構成は展示の構成と同一で、7つのコラムと2トピックが挿入されている点も展示と同様の構成となっている。時系列を基軸とする展示構成は、従来の考古学的な展示手法としては一般的である。

しかし科博が開催する展示としては、異なる視角に立った手法が盛り込まれているものと考えていた筆者にとっては、意外な構成であった。

展示の構成としては、各章冒頭の「頭骨の一人語り」が大型の特設ディスプレイで展示されており、視覚的な演出を企図したことがうかがえる。本書でも背景を章の色と一致させながら、見開き構成の左側に頭骨の右側面を大きく取り上げることが共通しており、各章冒頭で各時代の頭骨形態の遷移がビジュアルに一目瞭然である。

各章は当該時期における人骨の紹介に重点を置きながら、同時期性を担保する手法として考古資料に多くの紙幅を割いていることが共通する。また、人骨以外にも、食性や食料獲得にかかわる動物骨、あるいは土器に残された植物遺存体の検出法としてのレプリカ・セム法などの関連領域を広く射程に収めている。

本書のタイトルでもあり展示の骨子であるDNAの解説には、細心の注意と平易な表現が心がけられており、担当者の配意と工夫が読み取れる。筆者は、本書のプロローグの後に挿入されている解説「古代ゲノム研究の成果を読み解くために」が、端的にDNAを説明しており、その比喻表現にこそ本質的な意義があるものと感じたため、ここで一文を抜粋する。「(前略)ヒトの設計図を1冊の本に例えると、文字にあたるのがDNA、文章に相当するのが遺伝子、そして本に相当するのがゲノムということになる。」

本書のように専門性が極めて高い内容であっても、端的な説明に心配りがある点は、筆者を含む考古学分野の博物館学芸員にとっては、見習うべき点だと感じる。

とはいえ一般に難解な用語が頻出するため、本書ではコラムにまとめて用語を解説し、各章のセクション中に煩雑な専門用語の解説が入らないように配慮されている。DNA研究の基礎的な知識のない筆者にとっても勉強になった。

第2章「日本の基層集団－縄文時代の人と社会－」

章冒頭の「縄文人の一人語り」では、北海道船泊遺跡の人骨が展示・言及されていた。第1章の旧石器時代で紹介された、沖縄県白保竿根田原洞穴遺跡出土の人骨群のゲノム情報を踏まえ、

「縄文人には白保のゲノムの6割ほどが受け継がれているが、残りは沿海州の古人骨と類似する」ことを指摘している。

北海道の人骨を縄文時代の代表として取り上げたのは、遺存状態の良好な資料であったことに起因するのだろう。だが、そうした展示資料の選定に関する言及がみられなかったため、なぜ北海道の実例が選ばれたのか、直感的には理解が難しかった。本書の中で船泊遺跡の人骨を選んだ理由についてもう少し解説があると、より理解を深めることができるのではと感じた。

トピック1「イヌのきた道」

筆者は前職で、縄文時代のイヌ等について職務上携わることがあった。本書を一部執筆されている寺井洋平先生のご講演も拝聴し、ニホンオオカミと縄文時代のイヌにDNA上の深いつながりがあることを知った。本書では、ニホンオオカミの頭骨と縄文時代のイヌの頭骨の写真が並んで紹介されており、素人目にも両者が近接していることを実感できた。

最後に博物館行政に携わる筆者が特に心に残った展示について述べてい。本トピックでは、ニホンオオカミの剥製が展示されていた。2024年2月28日付けNHK「首都圏ナビ」の報道により、この剥製がニホンオオカミであることを中学生(当時小学生)が2020年に発見し、そのことを2024年に科博の『国立科学博物館研究報告』に掲載したことが発表されたものである。これは科博の継続的な収蔵資料の再整理事業を基盤としていることが前提となる成果である。

博物館行政においてはいわゆる「博学連携」や「地域連携」の単語で表現されてしまいがちだが、単発の事業ではなく中長期的な連携が果たされていることが、今回の成果を導いた要因の一つであることは疑いない。いわば地味な作業の組み合わせから、学術上の大発見がなされており、素晴らしい成果といえよう。

しかし、この報道についての解説は、残念ながら本書になく、展示にも見られなかった。この剥製は2024年5月から、科博の特別展「大哺乳類展3」で展示されていたため、再掲は避けたのかも知れないが、昨年度の展示を見ていない来館者もいると予想されるため、報道に言及があると、この剥製がさらに注目されたのではないかと感じた。

おわりに

市立博物館勤務の一学芸員として、全国トップクラスの博物館である科博の図録や展示手法を完全にコピーすることはできないまでも、職務として携わる展覧会や図録で取り入れられる手法が多くあり、大変刺激的であった。

本書の内容は多岐にわたり、紙幅の都合もさることながら、筆者の力量が不足しており、全体の紹介を果たせなかったことはご容赦いただきたい。

なお、7月から本展は名古屋市科学館で開催されている。まだ観覧されていない方にはぜひ足を運びいただくことをおすすめし、本書の紹介とする。

アルカ通信 No.263

発行日 2025年8月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp